

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 岸 貴介

岸貴介氏の博士号申請論文『ニーチェ哲学研究——「根本的に健康である」ことに基づく、最良の生存の追求——』は、ニーチェの哲学を、その最初期から最終期に至るまで、厳密な文献研究に基づいて、正確に再構成することを試みた労作である。その基本的な視座は、ニーチェのテキストを読み解く際に、読み解く側からの一切の思い入れを排除し、もっぱらニーチェ自身の視点から読むということにある。そして、そのために採られる方法は、——清水真木氏の見解を批判的に継承して——1886年春から1887年7月にかけてニーチェ自身が執筆した、自らの六つの著作への序文、これと関連する遺稿、および、ルー・ザロメの作品等に基づいて、ニーチェの著述全体を一貫して、ニーチェの自伝として、しかも、ニーチェ自身のさまざまな注釈や回顧に沿って読むということ、したがって、すべての著述をまた、ニーチェの「本来的な人格」（「英雄的性質」・「大いなる健康」）を反映したものとして、読むということである。

こうした本論文は、第一部「ニーチェ哲学の本来的部分」、第二部「ニーチェ哲学の問題と変遷」、第三部「総括」からなる。

その第一部において、ニーチェの「本来的な人格」をめぐる精密な規定が行なわれる。それによれば、その人格とは、「理想」・「真理」という「嘘」・「誤謬」・「怯懦」の帰結を拒絶し、「現実」を厳しく直視する、「古典的ペシミズム」に基づく「勇気」ある「自由な精神」である。この規定に基づいてまた、ニーチェの著作の時代区分が行なわれる。それによれば、ニーチェの思想の発展は、この「本来的な人格」の喪失——すなわち「病氣」——の時代から、その快癒（「大いなる健康」）への転回の歩みであり、その転回点にある著作が『人間的なもの、あまりに人間的なもの』（1879年）である。

第二部においては、第一部の成果を踏まえて、ニーチェ幼少期の断章から1888年、発狂するに至るまでの、ニーチェの膨大なテキストが精査され、それによって、重層的なニーチェの思索の歩みが、厳密に再構成されようとする。たとえば、後期の著作である『善悪の彼岸』（1886年）は、『人間的なもの、あまりに人間的なもの』の第二版として出版の計画がなされていたものに当たるものであることが、二つの書簡に基づいて立論されるに至る。

最後に、第三部は、それまでの論議がかなり長大なものとなったことから、その要点を整理し、ニーチェの「自伝」としてのニーチェ哲学を総括したものである。

本論文は、こうして、ニーチェの哲学全体をニーチェ自身の「自伝」（「回想録」）と読み、解釈者の主観的な観点を廃して、いわば客観的なニーチェ哲学像を確立しようと企図するものなのだが、しかし、ニーチェ哲学全体を「自伝」と読むという方法論が、この企図を実現しうるものであるのかに関しては論究がなく、根本的な方法論的問題を孕んでいると思われる。しかし、多くの二次文献をも渉猟しつつ、きわめて広範なテキストを精査することによって、ニーチェ哲学全体の発展史を精緻に再構成してみせたことは、ニーチェ研究に間違いなく一石を投ずるものである。

よって、審査委員会は、本論考が博士（文学）の学位を十分に授与しうるものと判定する次第である。